

『夜の泉の、ラプンツェル』

著：弓月あや

ill：北沢きょう

「もう黙って」

公威はそう囁くと周の顎を掴み、くちづけてくる。

「ん、んう……」

深いくちづけは一瞬で魂が蕩けそうになった。身体がグラグラ揺れそうになって、慌てて公威の背広にしがみつく。

ふわりと森の香がした。艶やかななんて言葉は、不釣り合いだと分かっているけれど、他に言葉が見つからない。それぐらい華やかな森林の香りだ。

「……森の匂いがする」

「森？」

唇が離れた瞬間、零れ落ちた言葉は、やはり森だ。

聞き咎められたけれど、それについて話すのは何だか恥ずかしい。

公威は一瞬だけ首を傾げたが、それ以上は言及しなかった。だが、周の頬が赤くなっているのに気づいたようだ。長い指で、そっと肌に触れてくる。

「頬が赤くなって、かわいらしい」

「かわいらしいって……。さっきも言ったとおり、ぼくはきみより年上だよ。きみは貴臣と同じ歳だろう」

そう口答えすると、公威はおかしそうに口元だけで微笑んだ。その視線は、頬を膨（ふくらませている駄々（だだ）っ子を見る目と同じだった。

「さて。私はどこで、あなたを抱いたらいいんだろう」

「どこって……。抱……」

その露骨な言葉が、あまりに唐突すぎるのと恥ずかしいのとので、周は瞠（どう）目（もく）したあと呆れ返ってしまった。

堂々と表情に「恥ずかしい」と表し、男の顔を睨む。

「きみね。恥ずかしいって言葉、知っている？ 大体」

そこまで話して、口を噤（つぐ）んだ。まじまじと見た男の顔が、信じられないぐらい美しかったからだ。

それなのに。こんなに綺麗な顔なのに。これから行う淫靡な行為を、恥ずかしげも躊躇（ためら）いもなく、「どこでやる？」と抜けぬけと訊くか。

……一体、どこから言い返したらいいのか皆目分からない。

「このアトリエか。それとも寝室へ行きますか。私は、どちらでも結構です」

「……こういう場面で、そんなことを訊く男は初めてだ」

「そうですか。私は気弱ですから、家主のご機嫌を損ねないよう、必死に振る舞っているんですよ。お気に障ったのなら、失礼」

いけしゃあしゃあと勝手な台詞を言っただけの厚顔の、どこが気弱だ。

周はそう言い返してやりたかったが、先ほどの濃厚なくちづけのせいで、言葉がきちんと出せそうにない。

ムツとして黙り込んでいると、さらに恐ろしいことを言われてしまった。  
「いっそ先ほどの貴臣たちのように、人目につきやすい場所にしますか。お望みなら、どこか公園にでも行って、木陰でいかがですか」

「冗談じゃない。無理。無理むり無理。公園なんて、絶対むり……っ」

とんでもない提案をして、公威は口元だけで不敵な笑いを浮かべた。自分の魅力を知り尽くした、婀娜っぽい微笑みだ。

そういえば。周はあることに気づいた。この家に入る前ぐらいから、彼は笑っていなかったことに。

四条家で話をしていた時には、ごく普通に笑っていたのに。

そこまで考えて、周は俯いて唇を舐(な)める。そんなことより、もっと重大な話があった。

「あのさ。さっきも言ったとおり、ぼくは元、結核病患者だよ。今は治癒したけれど、また再発するかもしれない。きみ、そんな人間と寝るの、怖くない？ 気持ち悪くないの？」

「そんなことは、どうでもいいんです」

「そんなことって何だよ。重大な話だろう。ぼくは」

「あなたは、ぐだぐだと煩(うるさ)い人だ」

「ぐだぐだと煩(うるさ)いって、失敬だね！ ぼくは別に」

そこまで言い返して、周の言葉が止まった。公威は話をしながら背広を脱ぎ、椅子の背凭(もた)れに放り投げたからだ。

格好をつけているわけではない。それなのに、サマになっている。  
(背が高いから……。何をやっても絵になる。すごくすてきた。貴臣もそうだけど、長身って、カッコいいなあ)

公威はシャツの袖口から、カフスポタンとネクタイを雀(むし)るようにして外した。そして、それも椅子の背凭(もた)れに放り出す。周はその所作を、じっと見つめた。

(彼の場合は、絵というより活動写真かな。それも……。日本のなんかじゃない。欧米の、ロマンティックな活動写真だ。一回モデルを頼んでみようか。とにかく、とてもいい)

このとんでもない場面でも、周の考えていることは絵だった。公威は何か感じたのか、少し眉根を寄せている。

「何ですか」

「いや……。きみ、スタイルが抜群だね。あのさ、モデルやってみない」

周の呑気な言葉を聞いた瞬間、公威の眉間の皺が深くなる。

「……あなたは、この事態が分かっているんですかね」

彼の口調からは、少し苛立ちが感じられた。面倒で仕方が無いという顔をしていた。

「さあ。選んでください。この部屋か。それとも、あなたの寝室か。もしくは、公園の木陰か」

逃げ場のない質問をされて、もうどうにもならなくて、「二階」と、小さな声で答える。

その露骨すぎる回答に、周はまた頬が真っ赤になってしまった。

「二階ね。では、あなたのご希望どおり二階に行きましょう」

公威は逃げ場を与えない、そんな言い方をする。この言い方だと、情事を望んでいるのは公威ではなく、周のようじゃないか。

乙女のように真っ赤になってしまった周に、公威は手を差し伸べた。その指先を見て、やっぱり長くて、綺麗な指だと思う。

くだらないことに感心していると、いきなり腕を引かれて、ぐっと抱き上げられてしまった。

「わ、ああ……っ」

あまりに突然すぎて、抗(あらが)うこともできない。不安定な格好だったので、慌てて公威の首にしがみついてしまった。

「何をするんだ！ 乱暴だよ」

そう抗議すると、またしても強く引き寄せられて、くちづけられた。

「ん、んん……っ」

熱くて艶かしい感覚が、口腔(こうこう)の中を支配するみたいだ。

ぞくぞくする。なめらかな舌先が歯列を舐め、うねるようにして顎の裏をくすぐった。その瞬間。周の中に残っていた理性が、音を立てて崩れ落ちる。

本文 p122～128 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>